

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

共通彫塑

戸田裕介教授

『陶淵明全集 上・下（岩波文庫）』

松枝茂夫, 和田武司 訳注, 岩波書店, 1990



雑詩其一

人生無根蒂
飄如陌上塵
分散逐風轉
此已非常身
落地爲兄弟
何必骨肉親
得歡當作樂
斗酒聚比鄰
盛年不重來
一日難再晨
及時當勉勵
歲月不待人

最下段の2行“及時當勉勵 歲月不待人”は、“時を逃さず一瞬を大切に勉学に励みなさい 歳月は人を待ってくれない”などと訳されているのを目にする。しかし陶淵明は、その前段で“隣人を集めて一緒に酒を飲もう”と言っている。であれば、陶淵明の意図は“歳月は人を待ってくれないから 生きているあいだは精一杯楽しもう”“酒を飲んで楽しもう！”だろう。まあ、私たちが30年ほど前までは、人生の勉強は酒場でしたものだ。飲みながら先輩や先生から話を聴き、ときには討論しながら、酒席で話したことの方が教室で聞いた話より何倍も印象に残っている。“斗酒聚比鄰！”漢詩集は陶淵明のみならずどれもこれも染みる。

『高野聖』

泉鏡花 著



『泉鏡花：1873-1939（ちくま日本文学；11）』

泉鏡花 著（筑摩書房，2008）所収

高校生の時に初めて読んだ。折々にもう10回くらいは読んだだろうか。飛騨から信州へ向かう深山の一軒家での魑魅魍魎との不思議な体験。「私（若いの）」が、旅先で知り合った「旅僧（高僧）」から、越前敦賀の旅籠屋に同宿した夜、寝床で聞いた話として語られる。書き出しから小気味よい泉鏡花独特の文章のリズムと、視覚的イメージを喚起し刺激する豊潤な語彙の森のなかで、読者はいつのまにか幽玄世界に引き込まれてゆく。読書中は言うまでもなく読み終えた後も、まるで自分だけのために製作された映画でも見終えたかのような、超現実的な視覚体験の実感がありありと身体に残る。（ところで、名作紹介文には不謹慎きわまりない余談だが、私の頭の中では、飛騨信州の山奥に住む青年と、筒井康隆の『陰惨録』で入浴している人物が時空を越えてつながっている・・・もちろん、いずれの書籍もおとしめる気は毛頭ないのだが・・・閑話休題）

『天才バカボン』

赤塚不二夫 著, 講談社, 1977



ピカソ、クライヴ・パーカー、赤塚不二夫。私が天才だと思うこの人たちと比較するなら、他はみな才気溢れる努力家だろう。この3人の発想とイメージに私はついて行けない。というか、もちろん後ろからならついて行けるのだが彼らの前に出られないのだ。特に赤塚不二夫。“目も鼻の穴もそれぞれ一つに繋がっているおまわりさん”、“犬とウナギの愛の結晶ウナギヌ”の自宅は当然川と陸の間にある。ウナギヌの家は斜面にあって、食卓の4本脚のうち2本は川につかっている。バカボンのパパは41歳なのか?!

私は小学生の頃、ともだちや近所のお兄ちゃんたちと少年マガジンや少年サンデーを持ち回りで毎週誰かが買って回し読んだ。『天才バカボン』は話が面白いだけでなく、突然劇画調になったり、パパの鼻毛のアップだけで数ページが終わったり・・・“絵”だけで驚く経験を何度も味わった。こんなことをやって良いのか? 「これでいいのだ!」

『小泉八雲集』

小泉八雲〔著〕, 上田和夫 訳, 新潮社, 1975



近代国家へ猛烈な勢いで突き進む明治日本に、文字化されることなく残っていた「ろくろ首」、「雪おんな」、「耳なし芳一」など妖怪話を、彼は夜な夜な日本人の奥さんに語らせては散文に書き起こした。日常生活、風俗習慣から、民話や伝説にいたるまで、失われつつあった古く、美しく、霊的な日本の口頭伝承を文字化した小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の功績は大きい。ギリシャ生まれアイルランド育ちの彼はアメリカを経由し日本に帰化して骨を埋めた。彼は鋭い洞察力と情感ゆたかな才筆で日本文化を世界に紹介した（八雲は東京帝国大学でも教鞭をとったが、文部省英国派遣から帰国した夏目漱石と入れかわりで同大を去っている）。本書には、『影』、『怪談・骨董』などの作品集から代表作を新編集し新訳で収録した八雲の代表作48編が収録されている。私が一番好きな掌編は妖怪話ではなく、彼が日常のささやかなできごとを書き留めた『くさひばり』だ。

『力なき者たちの力』

ヴァーツラフ・ハヴェル 著, 阿部賢一 訳, 人文書院, 2019



物理的な力、経済的な力、政治的な力、精神的な力、夢想する力、様々な力はいずれも目に見えない。これらの目に見えない力は、時に圧力（プレッシャー）になり、時には暴力（バイオレンス）ともなって、私たちの行動を支え、あと押し、促し、歪め、叩きつぶす。不条理演劇の劇作家であるハヴェルが、全体主義的圧政下で著した。この本は、東西冷戦下の東欧のアンダーグラウンドで細々としかし長くたくさんの人たちに読み継がれたと言う。1989年12月、ビロード革命直後のチェコにおいて、チェコスロバキア共和国の初代大統領に就任した著者が、まだ政治家でなかったときに書き下ろした本書の意義は大きい。既に21世紀も1/4を経過した時代を生きる私たちは、現代世界を覆う政治的なあるいは思想的な混沌をどう生き抜くのか。明快な文脈と論理的で公正な視点で執筆された本書は、ひとつの羅針盤（…今は“ナビ”か…）になり得るに違いない。

当館で所蔵していない資料も含まます。

TAC各大学（東京外国語大学、津田塾大学など）に所蔵がある資料をご希望の方は、カウンターで取寄せの手続きをしてください。

『賜物』

ウラジーミル・ナボコフ 著, 沼野充義 訳



『世界文学全集 2-10』池澤夏樹 編（河出書房新社，2010）所収

サントペテルブルクの貴族に生まれたナボコフは、ロシア革命後に一家でイギリスに亡命。ベルリンで作家活動を開始したのちアメリカに移住。アメリカ文学史上の代表的亡命作家となる。小説とは、作者の構想をもとに複数のストーリー（筋）が絡み合い、人物や事件がさまざまな関係性を保ちながら展開する文学の形式である。長くヴォリュームーな小説の代表的な国は、イギリスとロシアだろうか。ロシア文学と言えば、トルストイ、ドストエフスキー、ツルゲーネフやゴーゴリを思い描く人もいるだろう。登場人物が多い作品はその名前を覚えるだけでも大変だ。ロシア文学を読むとき記憶力が悪い私は、登場人物の相関図を紙に書き出す。ロシア語で書かれ日本語に翻訳された本書も小さめの文字で600ページ近い。長編の読書にチャレンジしたい人に勧める。読み終えた後は、峻峻な山の登頂に成功したような達成感と、他人の人生を歩んだような充実感が広がるだろう。

『長安の春 増訂版（東洋文庫；91）』

石田幹之助 著, 平凡社, 1967



こんなに豪勢で格調高く、それでいて風に乗り軽やかに漂ってくる春の花の香りや陽光まで匂い立つような情景を表現できる日本語があるのか。読み進むうちに、ついつい声に出して読んでみたくなってしまふ文章はリズムが心地良い。最高の素材が吟味され手業の粋をつくして制作された工芸品を手にとって眺めているような豊かな気持ちになる。本書は和文のひとつの頂点であろう。昨今日本語は、“この図書推薦文”のように横書きで読まれる機会が増えた。インターネットの普及がこの傾向に拍車をかけているのだろう。加えてどうやら、横長のかたちをした人間の目で文字を追うのには“横書きのほうが優れている”といった科学的説もあるようだ（ん？それなら絵も彫刻も横長の方が良いのか？）。その真贋はさておき、石田の豊富な漢籍の素養と芸術観を土台として書かれた日本文学の一つの頂点である本書『長安の春』は、縦書きでしか成立し得ない。

『「山月記」「李陵」』

中島敦 著



『中島敦：1909-1942』（ちくま日本文学；12）中島敦 著（筑摩書房，2008）所収

11の短編がおさめられた同書の1編『山月記』。主人公はプライドが高く、己の才能を磨く努力をおこたり現実に向き逃げ出す。孤独に苛まれ、ひねくれ、夢に見た高名な芸術家（詩人）になれなかったばかりか、最後（つい）には虎になってしまう哀れな男の変身譚。突拍子もない話なのに何もかも身につまされる。中島敦自身、教科書編修書記として戦時下のパラオ南洋庁で勤務した後、小説家として生きることを決意して帰国。しかし持病の喘息を悪化させ、書きたいものも書けないまま同年12月に33歳で亡くなっている。志し半ばでの中島の死は『山月記』の主人公よりむごい。悶え死んだのではないか。彼の死後出版された中島敦全集は世間で高い評価を獲得したが、早逝した彼がそれを知ることとは永遠にない。『山月記』は、芸術家が命をかけて紡いだ不朽の名作だ。一気に『李陵』も読んでしまおう！

『楽しむということ』

M. チクセントミハイ〔著〕, 今村浩明 訳, 思索社, 1991



心理学者チクセントミハイは“フロー概念”の提唱者。“ポジティブ心理学”と呼ばれる、人が幸せに生きることを科学的に探求する学問の中心的人物である。本書『楽しむということ』は「楽しむこと」の対象化を試みる彼の思考の原点となる重要な著作。私はこの本を読んで初めて、彫刻制作中にごくまれに起こる奇妙な体験が“フロー”だと知った。＊フロー（＝flow）とは、自分の能力が最高の状態で発揮されているときに自然におとずれるリラックスした精神的状態（言い換えるなら、無我の境地/没頭）私のケースでは、4時間余りの石彫制作時間を3-40分ほどのごく短い時間に感じた。具体的に言えば、昼食後に開始した石彫制作の工程が一段落し、休憩を取ろうとしたら陽が暮れていて驚いた。選択と集中でフロー体験を楽しもう！（とは言っても、1時間半ごとに休憩するような最近の“わんこそば”のような美大の短い実技授業時間では無理か?!）

『境界の美術史：「美術」形成史ノート 増補改訂』（ちくま学芸文庫；キ 30-2）北澤憲昭 著, 筑摩書房, 2023



この本に出会う前、2000年当時の私の明治期の日本美術史に対するイメージは曖昧で固く粗雑なものであった。本書を読了した後、それらの固定観念は破壊され多くがあらためられた。豊富な資料を丁寧に整理整頓しながら、抑制的かつ熱い筆致で書かれた本書は読み応え充分である。本書などの功績で、江戸末期から明治にかけて行われた我が国の西洋美術の導入と、当時、西洋文明と日本文化の接点に取り組んだ人々の苦勞は、史実として今では常識となりつつある。本書で展開される江戸末期から明治期の我が国の分析的批評は、美術史の専門家以外のひとと、この時代のダイナミックな価値転換とその経過に興味を持つきっかけとなった。本書は、西洋美術の輸入経過について暗かった私の目をひらき、鱗を何枚も剥がし取ってくれた。私が日本近代美術史についてあらためて勉強を始めるきっかけとなった大切な1冊である。